

【1】 次の挨拶文を読み、それに続く文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本日ここに*学位記を授与される皆さん、おめでとうございませう。東京大学教職員を代表して、心よりお祝いを申し上げます。また皆さんをこれまで励まし支えてくださったご家族や友人の方々にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

本年度は、修士課程3320名、博士課程1223名、専門職学位課程344名、合計で4887名の方々が学位を取得されました。そのうち留学生は113名です。

皆さんは、修了の日を迎え、これまでの日々を振り返り、様々な感動あるいは苦勞を思い起こしていると思います。仲間や教員とのかかわりのなかで、知の①創造の場としての東京大学を実感された方も多いでしょう。4月から、大学や企業で研究を続ける人もいれば、様々な職業の新たな世界に踏み出す人もいるでしょう。東京大学での経験が、皆さんの今後の活動の土台となっていくことを期待しています。

本日の学位記の授与を、皆さんやご家族の方々と共に、ここに集って、祝うことを私たちも楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形で式を執り行うことに致しました。いろいろな場所でライブ配信をご覧の皆さんと一緒に、いわば*バーチャルに拡張された安田講堂において、祝いたいと思います。

さて、新型コロナウイルス感染症は、またたく間に世界全体に広がり、経済や社会に大きな影響を与えています。その克服はまだまだ途上であり、収束に向けた様々な努力が日々続いています。国内外で、この感染によって多くの方々がお亡くなりになりました。お亡くなりになった方々のご冥福をお祈りすると共に、ご家族の皆様にご謙んでお悔やみを申し上げます。また療養中の皆様には、一刻も早い快復をお祈り致します。(以下略)

(五神 真) 令和元年度 東京大学学位記授与式 総長告辞「二〇二〇年三月二三日。

https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/president/b_message01_10.html 傍線引用者)

「おめでとう*スタンス」の最大のトクチヨウは、それがはつきりことばに出して言われることです。相手に対する思いやりや善意、祝福の気持ちはいちいちはつきりことばにしなくてもいい、という場合もあるでしょう。あまりそれをことばにしすぎると、かえって嘘っぽくなってしまう。むしろ心に抱いているだけの方がいい。とりわけ個人的な愛情などは、あまりしつこくことばにするよりは、「お気持ちだけ」の方がより温かみが伝わるということもありそうです。

しかし、2こと挨拶に関しては違ひます。挨拶はことばにしなければ意味がないのです。明確にことばとして口にされてこそ、挨拶は挨拶として機能する。

A ここでの挨拶の機能とはどんなものでしょう。それは「私はあなたに挨拶しているのだよ。あなたのことを祝っているのだよ」ということの確認です。しかもこの確認はしつこいほど何度も行われています。ボウトウの「おめでとうございませう」以降、この五段落だけでも実にたくさん「おめでとうフレーズ」が鑿められています。

- 「心よりお祝いを申し上げます」
- 「お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います」
- 「期待しています」
- 「ここに集って、祝うことを私たちも楽しみにしておりました。しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いつもとは違う形で式を執り行うことに致しました」
- 「いわばバーチャルに拡張された安田講堂において、祝いたいと思います」

「おめでとうございませう」とボウトウに言ったのだから、もう十分のようにも思えます。こんなに何度も*リマインドしなくて

も総長が学位の授与をお祝いしていることははっきりしている。これを聞いて「あ、そうか、忘れるところだった。これはお祝いだったのだ。リマインドしてくれてありがとう」と反応する人はまずいないでしょう。この学位記授与式という場がすでにお祝いの場だということはわかりきっている。式辞が「お祝い」以外のことをするとは考えにくい。そういう意味では、総長はたったの一言も「おめでとうございませう」などと言わなくても、十分「お祝いモード」を伝えられるはずなのです。それなのに、なぜ、しつこく「私はあなたを祝っているのだよ」と繰り返し確認するのでしょうか。

実は、この繰り返しにこそ意味があるのです。**B** 「挨拶」にしても「お祝い」にしても、意味を伝えることが第一の目的ではないからです。いや、意味はもちろん大事なのですが、**3** 意味を伝えることによって意味を伝えるのではない”と言ったらいいたでしょうか。

それはこういうことです。ことばを使うときに重要なのは、自分のメッセージを相手に伝えることだと考える人は多いでしょう。実際、ことばを使いながら一番意識するのは、「伝える」というところかもしれない。しかし、それはあくまで意識レベル。私たちはことばを使う際、意識している以上のことも行っています。意識レベルで「自分は〜ということ伝えてる」と思っているも、ことばの運用の中では**2** 抽象化されたメッセージ以上の何かをも伝えているのです。

それをするのがことばの「身体」の部分です。ことばの「頭」の方は、頭の中で用意したメッセージを送り出すことに精一杯で、受け取る側も、「あ、向こうがこんなメッセージを送り込んできた」というふうに対応する。こうして「頭」と「頭」がメッセージの投げ合いをする。ここでは「意味を伝える」「意味を受け取る」という行為を通して意味が生み出されているわけです。このようなメッセージのやり取りだけをとらえて「**4** ことばの出来事」として意識する人は多いでしょう。

C ことばはメッセージのやり取りだけで、カンケツするわけではありません。* 本書でもずっと話題にしてきたように、ことばには「形」があり「身体」がある。総長式辞の「お祝いモード」の繰り返しは、まさにこの「身体」にあたるわけです。「心よりお祝いを申し上げます」「お祝いと感謝の気持ちを伝えたいと思います」「期待しています」「……とお祝いことばを次々に繰り返されても、ことばの「頭」の部分は無反応でしょう。「あ、新しいメッセージが送られてきた」とは思わない。でも「身体」の部分はしっかりと反応するのです。なぜなら、繰り返しということばの物理的な* 横溢を通して、メッセージ内容としてはなかなか伝えることのできない、ことばの物質性と出会うからです。

人間は「頭」だけで自分の現実を生きているわけではありません。頭でわかっているにもかかわらず実感がないということがあるけれど、逆に頭ではわからないのに、実感だけはあるということもある。よくわからないけれど、無性にうれいとか、なぜかわからないけれど哀しくなってくる、といった言語体験はありうるのです。それを私たちが明確に体験するのは歌や踊りといった身体性を伴った活動の中ですが、そうしたものを伴わなくとも、ことばそのものの運動を通して、めでたさや、華やき、浮遊感、さらには* 厳肅さ、* 崇高さ、そしてかすかな哀しさや* 悲壮感などを身体的なこととして感じ取れることがある。これらは「頭」ではなく「身体」でこそ感知されるべき、「ことばの出来事」なのです。

式というのはまさにそういうものです。「頭」でわかっている時間の中の区切りを、より身体的に感じるために行われるもの。**D** 「そこにメッセージとしての意味を求めるのは違うのです。儀礼や祝祭は身体的に受け取られる必要がある。ほんとは歌ったり、ジャンプしたり、踊ったりすることでその意味を受け取る方がいいのかもしれませんが、そのかわりに私たちはことばのジャンプや踊りを体験する。式典にしばしば飲み食いが伴うのは、身体の反応を呼び覚ますためでもあるでしょう。

それにしても、式辞というものは実におめでたいものです。とくにボウトウには、いいことばかりが書いてある。もちろん「コロナ禍」とか、その他の難局についても触れられてはいますが、全体として、「いいこと」「楽しみなこと」そして当然ながら「めでたい

こと」が鏝められている。世界に対して肯定的こっぴやくなのです。「そりゃ、めりたい式辞なんだから当然でしょう」と思われるかもしれませんが、これは式辞だからというより、出会いの挨拶全般に共通するトクチョウです。

*示唆しそく的なのは、五段落目のボウトウの「さて」ということばです。ボウトウ部分のいかにも「挨拶」らしい多幸感にここでぐつとX×がかけられ、新しい展開につながっていくのがわかります。逆にいうと、今までの幸せ一杯な感じはあくまで「挨拶」にすぎなくて、このあと、茨いばの道とも言えるような内容が続くのかも思ったりする。

どうして「挨拶」はめでたさに満ちているのでしょうか。そのことを理解するには、そもそも「挨拶」とは何かということを考えする必要があります。同じ挨拶でも日本語のそれは定型性が強いと言われています。「こんにちは」などの決まり文句をマスターすれば何とかなる。英語でもHi, Helloのような決まり文句がありますが、E How are you? の場合、もう一言返さなければならぬ。教科書通りに「Hi, Hello」だっていいわけですが、別の言い方もあって、その後の会話のための「きっかけ」となりうる。もちろん、日本語の「こんにちは」もほんとうはそうで、無理にそこで終わる必要はありません。

いずれにしても、5 挨拶は、その後が続くことばとは少々役割が違うのです。あくまで「きっかけ」。ではその「きっかけ」を通して、人は何をしようとしているのか。先ほどの総長の式辞では繰り返しに確認の役割があることにも触れました。「私はあなたのことを祝っているのだよ」と総長はしつこいほど言う。それが結果的に、ことばの物質的な横溢と運動性を生み出すことにつながり、華やいだめでたさを創ってもいきましたが、これが確認の身振りでもあるということには覚えておきましょう。

なぜ総長はこんなに執拗しつやうに確認する必要があるのでしょうか。それはおそらく総長が確認しているのが、「祝っているよ」という事実だけではなく——何しろ、これは確認する必要がないほど明白なことですから——それに加えて「私はあなたを祝っているよ」という「私」と「あなた」の関係性でもあるからではないでしょうか。この関係性の確認を通し、総長はひよつとすると「これも仲良くしようぜ」「これまでも仲良かったよな」「俺たちは昔からずっと、そして*未来永劫えいこく仲良しよ」といったことも確認しているのかもしれませんが。そしてここまでくると、これは関係性の確認であるとともに、関係性の樹立／コウチクでもあるということばに気づきます。

つまり、総長は挨拶という場でしばしば行われる関係性の確認という身振りを通し、実際には関係づくりそのものを行っているわけです。これが「挨拶」の奥深い部分でもあります。確認のようなスタンスをとったこうした関係性の樹立こそが、挨拶のもっとも大きな機能だとも言えるでしょう。

(「挨拶を読む」『文章は「形」から読む ことばの魔術と出会うために』安部公彦 より一部改変)

*注 学位

バーチャル
スタンス
リマインド
本書でもずっと話題にしてきたように

大学や大学院で専攻分野の学業を修めたことを証明する称号のこと。
現実そっくりに作られ、現実の世界であるかのような様子のこと。
ある行動をとる際の、姿勢や立場。
思い起こさせる。

「ことばは、音があり、文字があり、硬さがあり、やわらかさがあり、長さや短さ、不安定さや、はかなさがある。ニコニコしたかと思うと、むすつしたり、居丈高いたけだかになったり。そうした様々な要素が絡んで、私たちの感情や生理に影響を与える」とある。

横溢 あふれるほど盛んなこと。

厳肅さ 気持ちを引き締まるほどおもしろいさま。

崇高さ 気高く偉大なこと。

悲壮感 辛く悲しい中でも健気けなげに立ち振る舞うという様子。

示唆的 それとなく教えること。また、暗にそそのかすこと。

未来永劫 遠い先の未来にわたって、いつまでも永遠に続くこと。

問一 二重傍線部a～eのカタカナを漢字に改め、漢字の読みをひらがなに直して答えなさい。

問二 空欄部 A、E に当てはまる語句として最も適当なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。
(ただし、同じ記号を二度使うことはできない)
アしかし イたとえば ウでは エだから オなぜなら

問三 傍線部「むしろ」という副詞の用例として、正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
アこの小説は難解でない。むしろ平易で分かりやすく、多くの人に読んでほしい作品だ。
イ優勝のかかった昨日の試合では、優勝旗むしろ優勝杯が手渡されることになっていた。
ウ予想以上にこの料理は甘味がした。むしろ砂糖を多く使ったことが分かる。
エ彼女は無事に大学を卒業して、むしろ企業に就職して安定した生活を始めた。
オ天気予報通りに雨が強く降っているが、むしろ傘をさして出かけようと思う。

問四 傍線部2「こと挨拶に関しては違います」とあるが、どう違うと述べていますか。その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。
ア意味を伝え合うという行為を通して、新たな意味を付与していくためには挨拶が不可欠であるということ。
イ日本人は言葉なしに解り合えるという暗黙の了解があるが、式典の挨拶は特別な意味を持つということ。
ウ聞き手がメッセージの意味を忘れないように繰り返すかどうかの中に、挨拶の本質が含まれているということ。
エお互いを認め合い、良好な人間関係やコミュニケーションのきっかけとなるものがまさに挨拶であるということ。
オ挨拶による祝福は明言することで体感されるのであって、ただ察してほしいという願望とは違っているということ。

問五 傍線部3「意味を伝えることによって意味を伝えるのではない」とあるが、では、「挨拶」や「お祝い」はどのようなことを目的としているからだと筆者は考えているのですか。その説明として、次の語句に続くように、本文から五十九字で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。(ただし、句読点も一字と数え、語注のマークは数えないものとする)

「ことを目的としているから。」

問六 波線部①「創造」・②「抽象」の対義語をそれぞれ漢字二字で答えなさい。

問七 傍線部4「ことばの出来事」の二つの側面について書かれたものを次のようにまとめました。次の空欄に当てはまる語句として最も適当な組み合わせを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

▼「ことばの「頭」の側面について」
「ことばは、メッセージを抽象化して伝達し、相手が理解するという形で I を行うが、その中で、情報や意図を伝えることを目的とした、 II なことばの働きを意味する。
▼「ことばの「身体」の側面について」
「ことばの形や響き、繰り返しといった物質的・身体的側面を通して、意味をこえた III (華やぎ、厳肃さ、喜び、悲しみなど)を相手に生じさせる IV に似た身体性を伴う、ことばの働きを意味する。」

- | | | | | |
|---|------------|--------------|-------------|------------|
| ア | I.. 意味の交換 | II.. 意識的で知的 | III.. 感覚や実感 | IV.. 歌や踊り |
| イ | I.. 感情の交換 | II.. 意識的で抽象的 | III.. 装飾や音響 | IV.. 食事や散歩 |
| ウ | I.. 祝福の贈答 | II.. 感覚的で直感的 | III.. 音声や衝動 | IV.. 遊びや競技 |
| エ | I.. 日常の儀礼 | II.. 間接的で形式的 | III.. 芸術や神秘 | IV.. 合唱や演奏 |
| オ | I.. 関係性の確認 | II.. 感覚的で特徴的 | III.. 物語や感動 | IV.. 運転や操縦 |

問八 空欄 X に当てはまる道語を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 拍車 イ 時間 ウ 迷惑 エ ブレーキ オ はしご

問九 傍線部「挨拶は、その後が続くことばとは少々役割が違う」とあるが、何がどう違っていますか、その説明として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 定型性の強い挨拶は、執拗に互いの関係を確認するという役割があり、その後が続くことばのような内容とは明確に違いがある。

イ 挨拶はその後が続くことばとは別に、会話のための糸口になるだけでなく、二者間の関係性を組み立てるという役割の違いがある。

ウ 挨拶は何よりも互いの祝福を表現するという本質があり、その後が続くことばは、それを裏付けるという役割の違いがある。

エ 日常生活の気軽な挨拶とは異なり、その後が続くことばは、話者の本心を聞き出すための関係性が問われるという役割の違いがある。

オ その後が続くことばには、挨拶による華やいだめでたさとは別に、ある種の言葉の物質的な横溢と運動性を確認するという役割の違いがある。

問十 次の傍線部の敬語表現について、敬語の種類を次のア～ウからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- (1) 私の父もそのように申し上げました。
- (2) 車内でお忘れ物をなさいませぬようにご注意ください。
- (3) 先日のご案内をすてにご覧になりましたか。
- (4) 温かいうちにどうぞ遠慮なくお召し上がりください。
- (5) 手元に資料がございますので、ご確認ください。

ア 尊敬語
イ 謙讓語
ウ 丁寧語

【二】次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(あらすじ)

大学で助教を務めている三十二歳の歩美は、地質調査で訪れた山口県の見島で、光平という青年と出会う。光平は、十八歳の頃に、陶芸家の父と喧嘩をして家を出た後、職を転々としていたが、江戸時代の名工・六代林半六こと泥平が最高傑作の茶碗を作ったとされる見島土を探す旅に出ていた。次の場面は、二人で探している道中の場面である。

「で、今年の二月だよ。親父が死んだって連絡が入ってさ。親戚に助けてもらって簡単な葬式を出したあと、実家の裏の窯へ行ってみたのよ。屋根は焼け落ちてたけど、窯はちゃんと残ってた。横口がふさがれてるのを見たら、やっぱり気になった」

横口というのは、各焼成室の側面にある開口部のことだそうだ。器の出し入れと薪の投入に使い、窯焚きが終わると煉瓦と泥で完全にふさいいで中を徐冷する。

「気になったって、窯の中の作品?」

「うん。親父が、サイゴに何を焼いたのか」光平はうなずいた。「横口を崩して中に入ってみたら、「驚いたよ。窯づめされていたのは全部、*紅萩手の茶碗だった」

「紅萩手……赤土を使った萩焼だよね」*篠田の口から確かそう聞いた。

「そう。茶碗の形はいろいろで、割高台もあれば、彫三島も御所丸もあったんだけど、どれも*釉薬は透明釉で、器肌は柿色。火事に**ア**ったなんて思えないほど、きれいに焼き上がった」

「温度コントロールが乱れただろうにね」

「いや、そこに驚いたんじゃない」光平は、**2**かぶりを振った。「窯の中にずらっと並んだ茶碗がどれも、親父らしくなかったんだ」「**ズ**という意味?」

「凝った器が好きだった親父の作だとは思えないほど、シンプルに作ってあるんだよ。*土味もオサえて、洗練された感じを狙ったっていうか。俺、すぐわかった。親父は、泥平が見島で作り上げた最高傑作がどんな茶碗だったか想像しながら、ひたすら紅菘手を焼いてたんだ」

「そういうこと——」

「作陶小屋は全焼だったけど、井戸をはさんで建った隣の物置小屋は、無事だった。陰干しにも使ってた小屋。その棚にも、素焼き前の紅菘手が何十個と干された。それを見て、思ったよ。親父はやつと、真剣に泥平と向き合おうとしてたんだなって。泥平をゴえるとか、大口たたく前に、どこまで泥平に近づけるのか、自分の力を見極めようとしてたんだなって」

噛み締めるように言う光平の声に、非難めいた色はもうなかった。わずかにあごを引き、正面を見据えて続ける。

「その最中に死にしまったんだからな。改心するのが遅えっての」

アルコールに溺れて人生を損ないつつも、さいごに見せた陶芸と泥平への執念。だが結局、それがどんな器として焼き上がったか見ることもなく亡くなってしまったということか。

「お父さん、見島土を使って作ったのかな」歩美は言った。

「どうだろ。そう簡単には手に入らないだろうし、笠間の赤土を使ったんじゃないかな」そうつぶやいてから、ふと表情を和らげる。「で、たぶんそれと同じ土だと思うんだけど、焼け残った物置小屋の作業台に、きちんとビニールで包まれた赤茶色の粘土があつてさ。俺、なんでかはマジでわかんねーんだけど——」

光平は照れ隠しのように鼻のつけ根にしわを寄せた。

「気づいたら袖まくって、その粘土を練り始めてたのよ」

「へえ、そうなんだ」

「粘土が、氷みたいに冷たくってさ」光平は地面の土くれを片手でもてあそびながら言う。

「それ練ってるよ、頭ん中にぶわーって湧いてくんだよ。子どもの頃のこと。ああ、真冬に土揉みさせられるの嫌だったな、とか。いくら力を込めても体重かけても、なかなか練れなかったな、とか」

少年時代の光平の姿が、まぶたに浮かぶ。紙粘土で怪物でも作っていいような歳の男の子が、薄暗い作陶小屋で一人、必死に大きな粘土の塊を捏ねているのだ。思わず手を差し伸べてやりたくなった。

「気づいたら、無心で練ってたよ。練り上がったら、やっぱ*水挽きもしてみたくなるじゃん。そしたら物置の奥に、昔の蹴ろくろがほこりかぶってんのを見つけてさ。引っ張り出して油サしてみると、ちゃんと回るんだよ」

「茶碗を作ったの？」

「うん。十年以上やってなかったのに、意外と挽けるもんなんだよな。体に染み込んでる。子どもの頃は全然うまくできなくてさ。ちっこい手で一生懸命やるんだけど、なかなか思うようにのばせない。親父が横から手を添えてても、つい強引なこととしてぐにゃつと崩れる。怒られて隅っこで泣いてたら、じいちゃんがアメ玉持って慰めにくるんだよ。『土にはの、土のなりたい形があるんじゃない。』その声をよう聞きながら、さぐりさぐりのばすことや」

「土のなりたい形——」

理にならなっていると思った。一般に、粘土鉱物というのは極めて微細であると同時に、平べったい形をしている。粘土の中ではその*扁平な粒子が重なるように存在し、その隙間に水が入って潤滑油のような働きをするために、力を加えれば滑って動く。それが、粘土が可塑性——変形させた力を取り去っても形がもとに戻らない性質——をもつ大きな理由だ。

しかし、粘土鉱物の種類や量、他の鉱物との兼ね合いによって、その滑り具合は大きく違ってくる。どの程度自由に形を変えら

れるかは、粘土ごとに個性があるのだ。

無意識にだろうが、光平はまるで器を挽いているかのように、湿った土くれを長い指で優しくのばしている。その様子を見つめていると、ろくろの粘土に触れる彼の手つきが想像できる。五感を研ぎ澄ませ、粘土からの反応を漏らさず汲み取ろうとする繊細な指の動きまでもが。

そんな彼の指先が、ふと自分の二の腕あたりにも触れた気がして、肌が痺れた。

「久しぶりにたった一碗挽いただけで、何言っただって感じだけど——」

光平は遠くを見つめたまま言った。

「何とか形にできた茶碗を見たとき、もしかしたら、俺も泥から人間に戻れるかもしれないと思った。伝統とか芸術とか、儲かるとか儲からないとか、そういうことはおいといてさ。粘土の塊を、器にする。ただそれだけで、仕事したなって思ったんだよ。やっと

6 人間らしい仕事を

「——そう」とうなずいただけだったが、わかる気がした。

土は、草木や石と同じく、人間にとっても身近な自然物だ。そのままでは役に立たない土を使って、器という道具を作る。形ないものを形にして、新たな価値を生み出す。すべての生物の中で、ヒトをヒトたらしめている「仕事」というものの原点は、きっとそこにあるのだろう。

「仕事をするための技は、これからまだまだ磨かなきゃだけど、もう俺の肉になってる」

光平は両のてのひらを見つめ、それをゆっくり握りしめた。

「親父にほめられたことなんて、ただの一度もなかったのにな」

歩美は光平の横顔を見つめた。この人にはやはり、*良平と似たところがあるのではないか。さいごには父親のもとへ戻った七代半六と、だからこそ光平は見島へ来て、今も土にまみれているのだ。

(伊与原 新『藍を継ぐ海』より引用、一部改変)

*注 泥平

「林半六」の名を襲名した林泥平のこと。なお、襲名とは、名に備わった伝統を引き継ぐときに、親や師匠の芸名を引き継ぐことを意味する。文章の末尾の*良平は、泥平の息子の名前。

紅萩手

鉄分の少ない土を使い、赤みを帯びた独特の風合いを出す、陶芸の萩焼のこと。

篠田

光平が働かせてもらっている、篠田窯の窯の主。

釉薬

素焼の陶磁器の表面に光沢を出す薬品。

土味

陶芸作品における土本来の質感や焼成された肌の風合い。

水挽き

ろくろで成形時に滑りを良くするため、水を使って成形すること。

扁平

凹凸が少なく、ひらべったいこと。また、そのさま。

問一 二重傍線部d、eのカタカナを漢字に改めた場合、正しいものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a. ア 最後 イ 最期 b. ア 会った イ 遭った c. ア 抑えて イ 押さえて

d. ア 超える イ 越える e. ア 刺して イ 差して

問二 傍線部「驚いたよ」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親が作った茶碗が、泥平の最高傑作と見分けがつかないほどよく似ていたから。

イ 実家が火事で焼け落ちたにもかかわらず、父親の茶碗がきれいに焼き上がったから。

ウ 凝った器を好んでいた父親の作だとは思えないほど、洗練されたシンプルな茶碗だったから。

エ 焼き上がった茶碗は光平の理想としていた器で、父親の個性が感じられなかったから。

オ 器の出し入れと薪の投入や徐冷も適切なコントロールがされていると言えるものだったから。

問三 傍線部2「かぶりを振った」の用例として、次の中から正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア友人に手伝おうかと聞くと、彼は静かにかぶりを振った。

イ先生の説明を聞きながら、うなずいてかぶりを振った。

ウ寒さに震えながら、肩にかぶりを振って歩き出した。

エ拍手に応えるように、笑顔でかぶりを振ってみせた。

オ驚いた彼は、思わずかぶりを振って喜びを表した。

問四 傍線部3「大口たたたく」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア言ってはいけないことを言ってしまう。

イ大きな夢を語り、多くの人に希望を与える。

ウこじつけを言って自分自身を正当化する。

エ身の丈に合わない、大げさなことを言う。

オ他人が話している途中に割り込んで話す。

問五 傍線部4「無心」と同じ意味の四字熟語として正しいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア五里霧中

イ無味乾燥

ウ一心不乱

エ以心伝心

オ疑心暗鬼

問六 傍線部5「その声をよう聞きながら」とあるが、具体的にどうすることか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア粘土を一気に焼き上げるのではなく、少しずつ温度を調整していくこと。

イ陶芸家の父親の指導の下、細やかな指の動きで、粘土を優しく伸ばすこと。

ウ粘土がどのくらい自由に形を変えられるのか、力を加減して確かめること。

エ粘土鉱物の種類や量、他の鉱物とのさまざまな兼ね合いを調べること。

オ五感を研ぎ澄ませ、陶芸家としての個性をあますことなく発揮すること。

問七 傍線部6「人間らしい仕事」とはどのような仕事か。「〜という仕事。」に続くように、本文中から二十一字で抜き出しなさい。(句読点も一字と数える)

問八 傍線部7「だからこそ光平は見島へ来て、今も土にまみれているのだ」とあるが、このときの光平の心情として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア江戸時代の名工である良平のように、敬愛し続ける父・泥平を見習う生き方に改めて感動している。

イ泥平に近づこうとした父を亡くした今、再度、真剣に陶芸に向き合いたいという素直な気持ちが出てきている。

ウ祖父から陶芸に関する知識や技術を習得した今、最高傑作の茶碗を作るという強い野心が芽生えている。

エ幼い頃によく慰めてくれた亡き祖父の墓前に、陶芸家としての作品をささげたいという願いが生じている。

オ安定した仕事を探す日々から抜け出すために、覚悟のある陶芸を仕事にしようという意欲がわいている。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

今は昔、*小野宮の大き大臣、左大臣にて、aおはしましける時、一三月の中旬のbころほひ、公事によりて内に今トナツテハ昔ノコトダガ、太政大臣ガ、マダ左大臣デ、イラツシヤッタトキ、三月ノ中ゴロノコト、政務ノタメ宮中ニ参上

参り給ひて、陣の座におはしましけるに、上達部二三人ばかり参り会ひて候はれけるに、*南殿の御前の桜の、ナサツテ、陣ノ座ニ着イテイラツシヤルト、上達部ガニ、三人ホド参上シオ会イナツテ、着座ナサツタトコロ、南殿ノ左近ノ桜ガ、

器の大きに神さびてえもいはぬが、枝も庭まで差し覆ひて、おもしろく咲きて、庭にひまなく散り積みて、風に

何トモイイヨウモナク神タシク

枝も庭ヲ覆ワバカリニ、

花ヒラガ庭一面ニ

吹き立てられつつ、3水のなみなどのやうに見えたるを、大臣、「えもいはずおもしろきものかな。例はいみじく咲

ノデ、大臣ハ、

例年ハ並マデハナク咲ク

けど、いとかかる年はなきものを、*土御門の中納言のA参られよかし、4これを見せばや」と、のたまふほど

参ラレルトヨイガ、

ト オツシャツテイルト、

ノダガ、コレホドノ年ハ

に、はるかに上達部の前を追ふこゑあり。

ハルカ遠クノ方デ 上達部ノ*先払イノ声ガ聞コエテキタ。

*官人を召して、「この前は、誰が参らるるぞ」と問ひ給ひければ、「土御門の権中納言の参らせ給ふなり」

ヲ呼ンデ、 コノ先払イノ声ハ、 参ラレルノカ。 ト オ尋ネニナルト、

参ラレルノデゴザイマス。

と申しければ、大臣、「いみじく興あることかな」と5喜び給ふほどに、中納言参りて座に居るや遅きと、大臣、

ト申シ上ゲタトコロ、

コレハ マコトニ オモシロイコトダ。

座ニ着クカ着カヌカノウチニ、

「この花の庭に散りたるやうは、何が見給ふ」とありければ、中納言、「げにおもしろう候ふ」と申し給ふに、大

ドウゴ覧ニナルカナ。

マコトニ

ト 申シ上ゲナサツタトコロ、

臣、「6さては遅くこそはべれ」とありければ、中納言、心に思ひ給ひけるやう、「この大臣は、ただ今の和歌に

当代ニオイテ 和歌ニ

極めたる人におはします。それに、はかばかしくもなからむことを、面なくうちいでたらむは、あらむよりは、

イラッシャル

ソノ方ニ、

タイシタコトモナイヨウナ歌ヲ、

恥ズカシゲモノク 詠ミ出シタラ、詠マズニイルヨリハ

いみじくつたなかるべし。さりとして、やんごとなき人のかく責め給ふことを、すさまじくてやまむも、便なかる

スツト見苦シイダロウ。

ソレニシテモ、

高貴ナ人が

コノヨウニ催促ナサルノニ、

無愛想ニ オ断リスルノモ、ヨロシクナイ

べし」と思ひて、そでをかきつくろひて、かくなむ申し上げける、

ダロウ。

ソデヲ正シテ

コノヨウニ

申シ上ゲタ歌

とのもりの *とものみやつこ 心あらば 7この春ばかり あさぎよめすな

トノモ寮ノ 掃除ラスル役人ヨ、 モシオ前ニ

朝ノ掃除ラシテクレルナ

と。大臣これを聞き給ひて、いみじくほめ給ひて、「この返しさらにえせじ。劣りたらむに、長き名なるべし。さ

オ聞キニナツテ、

タイソウ 感動サレ、

コノ歌ノ返歌ハ 到底デキナイ。

返歌ガ永ク汚名ヲ残スコトニナロウ。

りとして、まさらむことはあるべきことにもあらず」とて、ただ8旧歌ぞ思えまさむと思ひ給ひて、*忠房が*唐

トハイエ、

ト イツテ、タダ古歌ヲ

引ク方が 適切デアロウト

思ワレテ、

忠房ガ 唐ヘ

へ行くとして読みたりける歌をなむ、語り給ひける。

引用サレナサツタノダツタ

(敦忠中納言、南殿の桜を和歌に読むこと「今昔物語集 本朝世俗部一」第三十二『新潮日本古典集成』より一部改変)

*注 小野宮の大き大臣

太政大臣まで登り詰めた藤原実頼のこと。平安時代前期から中期にかけての公卿・歌人。

陣の座

内裏の近衛府内に設けられた、大臣以下の公卿が政務や公事を評議した場のこと。

上達部

摂政・関白・太政大臣・左大臣・右大臣などの三位以上の上級貴族。

南殿

公事を行う建物。南に面して、東に左近の桜、西に右近の橘が植えられていた。

土御門の中納言

三十六歌仙の一人、藤原敦忠のこと。平安時代前期から中期にかけての歌人。

先払いの声

前方にいる者を追い払う声。

官人

役人のこと。

とのも寮

主殿寮とは乗り物、宮中の灯火の管理・薪炭の調達・庭の清掃などを司った役所。

とものみやつこ

主殿寮の下級役人。

忠房が唐へ：

かつて藤原忠房が菅原道真を主とした遣唐使船に乗ることが決まった際に詠んだ、「なよ

竹のよ長きうへに初霜のおきもるてもを思ふころかな」(なよ竹の節のように長い夜に

初霜が置き、夜長を起きて物思いをするこの頃です。)のこと。

問一 波線部 a、d の本文中にある語句の読みを、例にならって現代仮名遣いに直し、ひらがなで答えなさい。

(例) みる ↓ いる

a おはしまし

b ころほひ

c のたまふ

d こゑ

問二 二重傍線部 A 「参られ」、B 「問ひ給ひければ」の主語として、最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 大臣

イ 上達部

ウ 中納言

エ 官人

オ 筆者

問三 傍線部 1 「三月」の「旧暦の月の異名」を、現代仮名遣いのひらがなで答えなさい。

問四 傍線部 2 「おもしろく咲きて」の現代語訳として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 趣深く風情のある様子で咲いている

イ 不思議で神秘的な様子で咲いている

ウ 見る目を楽しませるように咲いている

エ 人目を引くほど、珍しく咲いている

オ 面白おかしく、奇妙に咲いている

問五 傍線部 3 「水のなみなどのやうに見えたる」とあるが、何がどのように見えたというのか。次の説明文の空欄に当てはまる語を、かっこ内の条件に合わせて説明しなさい。

十五字以内

が風に吹かれて、水面の波のように見えたということ。

問六 傍線部 4 「これを見せばや」は「これを見せたいものだ」という意味であるが、なぜ「見せたい」と思ったのか。その理由として最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 南殿の桜の花びらが風に舞っている様子から、趣深い古歌を引用させたかったから。

イ 南殿の桜の花びらが庭一面に散っている様子から、優れた歌を詠ませたかったから。

ウ 桜の花びらが散る下を歩く人々の様子から、絵巻物に合う歌を想起させたかったから。

エ 遠くで上達部が人を追い払っている様子から、遊び心のある和歌を詠ませたかったから。

オ 官人が左大臣の問いに答えた様子から、宮中の何気ない日常を詠ませたかったから。

問七 傍線部5「喜び給ふほどに」とあるが、なぜ喜んだのか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 夢で見たことが現実になったことに驚くとともに、あまりの偶然に喜びを抑えきれなかったから。
- イ 官人との会話の中で、中納言が自分のことを称賛していることを知ったため、嬉しくなったから。
- ウ 大臣が期待していた以上に桜の花が美しく舞い散っており、その様子に心を強く動かされたから。
- エ 中納言に絶景を見せて歌を詠ませたいと思っていたら、当の中納言がやってくるのが解ったから。
- オ 和歌を極めている中納言が、大臣の広い庭の桜を詠みに訪れたことを知って興奮してしまったから。

問八 傍線部6「さては遅くこそはべれ」は「それにしては歌を詠むのが遅いですね」という意味である。中納言はこの時、どのように考えていたか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 和歌に詳しい大臣に自分が詠んだ和歌を認めさせ、大臣の返歌の腕前を見て、自分の方が大臣より上だということを知り、周囲に知らしめたいと考えていた。
- イ 和歌に詳しい大臣の前でたいしたことのない歌を詠むのは気が引けるが、詠まないよりは詠んだ方がよいし、催促を断るのもよくないと考えていた。
- ウ 和歌に詳しい大臣の前で詠むような歌は思い浮かばないが、もしかしたら大臣が歌をほめてくれるかもしれないので、試しに詠んでみようと考えていた。
- エ 和歌にこだわりの強い大臣のことなので、私が優れた歌を詠んだところで、なにかにつけて文句を言うだろうが、催促もあるので詠むしかないと考えていた。
- オ 和歌にこだわりの強い大臣のことなので、優れた歌をいきなり詠むのは失礼になるが、詠まないより詠んだ方がよいし、催促を断ることはできないと考えていた。

問九 傍線部7「この春ばかり」とあるが、どのような春を指すか。最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 桜が美しく咲いているこの春
- イ 桜が美しく散っているこの春
- ウ 中納言に偶然出会えたこの春
- エ やる気に満ちあふれているこの春
- オ 春の暖かさが眠りを誘うこの春

問十 傍線部8「旧歌ぞ思えまさまむ」は「古歌を引く方が適切であろう」という意味である。大臣がそう思った理由として、最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 中納言の洗練されていない歌にあきれ、適切な返歌を思いつくことができなかったから。
- イ 中納言の未熟な和歌を改善しようと熟考するあまり、返歌を考える余裕がなかったから。
- ウ 中納言の歌は素晴らしかったが、返歌で中納言の立場が悪くなると心配してしまったから。
- エ 中納言が想定外の抜きん出た和歌を詠んだため、頭の中が真っ白になってしまったから。
- オ 中納言の素晴らしい歌に見合う返歌も、それを超える返歌も思いつかなかったから。

問十一 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 中納言の詠んだ素晴らしい歌に大臣も感動し、返歌として古歌を引用し、その場をやり過ぎた。
- イ 官人たちは大臣が来るために先払いをし、中納言とともにお客である大臣を歓迎してもてなした。
- ウ 大臣は南殿の桜を中納言に見せてやりたいと思いい、中納言を呼び出して歌を詠むように言った。
- エ 中納言が歌を詠むことをためらっている間に大臣が先に素晴らしい歌を詠み、誰もが感動した。
- オ 南殿の桜が美しく、今は亡き中納言が生きていたら喜んだのに、とその場の人々は言い合った。

(問題は以上です)

※印の空欄は記入しないこと

※
すべて
2点

【一】																	
問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一								
(1)				①	繰			A	a								
イ	イ	エ	ア	破壊	り返し	オ	ア	ウ	特徴								
										②	と	B	b				
														具体	と	オ	冒頭
(2)																	
ア				③	と			C	c								
										ア	性	と	A	オ	冒頭		
(3)																	
ア				④	と			D	d								
										ア	と	エ	おしょう				
(4)																	
ア				⑤	と			E	e								
										ウ	と	イ	構築				
(5)																	

ことを目的としているから。

※
※

【二】							
問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一
イ	形ないもの	ウ	ウ	エ	ア	ウ	a
							b
							イ
イ	のを形にして、新たな価値を生み出す	10	10	20			c
							d
							ア
イ	のたもう						e
							イ
							イ

という仕事。

※
※

【三】												
問十一	問十	問九	問八	問七	問六	問五	問四	問三	問二	問一		
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	A	a		
									B	おわしまし		
									ア	b		
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	ウ	おわしまし		
											10	ころおい
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	ウ	おわしまし		
											c	のたもう
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	ウ	おわしまし		
											d	こえ
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	ウ	おわしまし		
											c	のたもう
ア	オ	イ	イ	エ	イ	見えたということ。	ア	やよい	ウ	おわしまし		
											d	こえ

が風に吹かれて、水面の波のように

※
※

受験番号